序――「日本研究」の必要性とは？

Introduction: Why Do We Study Japan?

郭　南燕
Nanyan Guo

本号では「日本研究」を通じて人文科学の存在意義について考えたいと思う。

現在は人文科学（the Humanities）の有用性が問われている時代である。日本だけではなく海外でも、大学の学科調整や経費削減の必要があるたびに、「人文科学」が俎上に載せられる。2015 年 6 月 8 日、文部科学省は全国 86 の国立大学に既存の学部を見直すよう通知を出し、「特に教員養成系や人文社会科学系学部・大学院は、組織の廃止や社会的要請の高い分野に転換する」ことを求めた。

「社会的要請」によってのみ、人文科学の必要度を測ることは賢明な方針とは言えないだろう。なぜならば、人文科学にはそもそも、人間の言語と思想を批判的に分析し、人間社会を成熟させ、「社会的要請」を生み出す役割があるからだ。例えば、作曲家、画家、作家などは、「社会的要請」に応えるよりは、むしろ個性と才能によって優れた作品を創り出して社会で享受され、研究者や評論家はそれらの作品の意義と社会的効果を解明し、鑑賞と受容を導く。このように人文科学は、「社会的要請」より先に進んでいるものでなければならない。

海外からの視点で行われる「日本研究」は、人文社会科学の多くの分野にまたがり、日本の言語・文学・歴史・経済・経営・政治・外交・社会・教育・法律・美術・音楽・映画・環境などを対象とする。1970 年以降、世界で展開されてきた「日本研究」には、日本経済の「奇跡」の解明という目的が働いたことが大きかった。1990 年代にバブルがはじけてからは、国によって研究者数が減り、いくつかの国で日本語教育の規模が若干縮小されたことはあっても、長年の蓄積と、活発な学術交流により、日本研究は質的成長と深化を見せている。

国際交流基金の調査によれば、2012 年現在、海外の日本語学習者数は 400 万人近い。1970 年代前半の日本語学習数 10 万人と比べれば、40 倍の増加である。学習者の動機の 1 位は日本語（62.2%）、2 位は日本語でのコミュニケーショ

ン（55.5%）、3 位はマンガ・アニメ・J-POP（54%）、4 位は日本の歴史・文学（49.7%）などへの関心からであり、5 位は就職（42.3%）に有利なためという[1]。日本語、日本文化そのものが外国人に魅力を感じさせていることがわかる。

世界の日本研究を支援するために 1987 年に京都に設立された「国際日本文化研究センター」（日文研）は 30 年近く、多くの研究者のために役立てられている。本誌は、世界各地の日本研究の状況を収集し、発信することによって、日本研究者のネットワーキングに貢献しようとしている。本号の寄稿者は皆、日文研を訪れたことのある研究者であり、本誌のミッションを支持してくれている。「日本」を比較的に見て、研究者自身の居場所の文化的情報を活用し、広い視野を用いている。

また、寄稿者たちの「日本研究」の内容は、人文科学の必要性を考える上での示唆も与えてくれている。つまり、歴史から現代生活に有益な啓示を汲みとるため、科学技術の引き起こした環境破壊と倫理的問題を解決するため、日本の戦争史を検証するため、他国の科学技術史を解明するため、アジアの地政的緊張を緩和させるため、東アジアの近代文学を理解するため、世界の消費形態の行方を見通すため、海外で形成された美意識の源流を探るためには、まさに人文科学の多分野の知識と方法を用いなければならない。

学際性、国際性、比較性を伴う「日本研究」は、「日本を通して世界を知る」という目的意識によって支えられている。本号の論文と報告は、人文科学研究者の姿勢についても考えるきっかけを与えてくれている。内容は大きく分けて、「日本研究の有意義性」「海外の大学における日本研究」「私の日本研究」である。

第 1 部「日本研究の有意義性」では、まずニュージーランド・オタゴ大学歴史学科の将基面貴巳氏による「教授就任講演」（2015 年 5 月）の英語原稿を掲載する。氏は自身の西洋政治思想史と日本政治思想史との比較研究を振り返ることによって、英語圏大学が直面する人文科学の教育と研究の危機的状態に対処すべきヒントを与えてくれる。これらのヒントは、日本の人文科学研究者にとっても重要なので、本講演の日本語訳も併載する。

1　国際交流基金『海外の日本語教育の現状：海外日本語教育機関調査』（くろしお出版、2013 年、7–9 頁）によれば、海外の日本語学習者は 2012 年現在、3,985,669 人で、2009 年より 9.2% 増である。この数字は日本語の独学者を含まない。

将基面氏は、中世神学者ウィリアム・オッカムと、20 世紀日本の経済学者でキリスト教思想家矢内原忠雄との異議申し立てを比較して、歴史的洞察は、現代の政治経済に関し先見の明をもたらすものだと考える。また、人間の条件と価値を探求する人文科学という学問の自由が、経済的有効性をもって学問の価値を測ることによって脅かされている昨今、研究者は個人の「興味」や「知識愛」だけではなく、研究目的と社会的効果に関する明確な意識を持ち、それを示すことが大切だと指摘する。

Yuzo Ota（太田雄三）氏の論文は、世界的に著名な免疫学者で随筆家・戯曲家でもある多田富雄の人生と価値観を紹介する。多田は 2007 年に「自然科学とリベラルアーツを統合する会」を設立して、地球環境を破壊し人類最大の脅威となった科学技術の問題を解決できるのは、「科学の知」と「人文の知」の統合だけだと信じていた。多田は、広い意味での教養と「リベラルアーツの知」を科学研究の基盤とし、既存価値観への反逆と伝統価値の継承との間でバランスを取り続けた人である。その魅力的な人間像が Ota 論文の中で躍動している。

第二次世界大戦から 70 年が経った。戦後日本文学の大半は、日本人の蒙った被害を描写することに専念し、加害という事実に目を瞑っている。明治大学の Takeuchi Emiko（竹内栄美子）氏の論文は、被害者意識と加害者意識を同時に描写する数少ない文学者の一人である堀田善衛の作品を取り上げて、戦争体験を客観的に清算することの必要性を示している。そして、人間の意識改革における人文科学の重要性を際立たせてくれる。

北京中医薬大学の梁嶸氏は、日文研で研究方法を取得してから、中国医学史の研究を推進してきた中国研究者 5 人を紹介する。医学史の研究は、現代医学の促進と深い関係にあり、梁氏自身も先人の知恵を吸収して、新しい診療方法を開拓している。すなわち、「日本研究」は「日本」に終わらず、「東アジア」への貢献に密接につながっていることがわかる。

中国社会科学歴史研究院の王鍵氏は、1980 年から現在まで中国大陸で行われてきた日本と台湾との関係に関する研究成果を丁寧に概説してくれる。網羅された文献は、学術的に貴重であるばかりでなく、台湾・日本・中国の相互関係の平和的発展に寄与できるものでもある。天津師範大学の高文勝氏は、蔣介石と日本と中国共産党の間の複雑な利害関係を分析した、台湾中央研究院黄自進氏の著書『蔣介石與日本』を客観的に批評する。黄氏の著書と高氏の評論から

読み取れるのは、国際社会の平和には、紛争の歴史を越えて、経済的・文化的相互利益を求めることが大切だというメッセージである。

浙江工商大学の陳紅氏は、魯迅文学の重要な一部である「翻訳文学」を取り上げる。魯迅が中国語訳した外国文学216篇のうち、約8割が日本文学と日本語訳ヨーロッパ文学であった。陳氏は、魯迅の使用した日本語訳ヨーロッパ文学の底本を通して、魯迅の翻訳観と特色を分析している。周知のように、近代初期の日本文学と日本語訳文学は中国だけではなく、朝鮮半島にも大きな影響を与え、東アジアの近代文学の形成にとっては不可欠なものであった。神戸大学の竇新光氏は、中国語・韓国語・日本語を駆使して、東アジアの比較文学を研究し、日本文化の幅広い影響を突き止めて、日本文化を客観的に理解しようとしている。

清華大学の王成氏は、中国において松本清張の推理小説およびその映画化が1980年代から現在まで絶大な人気を誇っている実情を紹介し、清張が描いた日本社会の問題は、文化大革命（1966～76年）を経験した中国人に人間性の矛盾を反省させ、1990年代以降の中国で横行する汚職と犯罪を予告し、中国人読者は清張の小説から、自国の文学では得られない社会批判の精神を読みとっていることを指摘する。

ブルガリア科学アカデミーのMaya Keliyan氏は、日本とブルガリアにおける社会の近代化、中産階級の特徴、農村地域の発展、消費形態の変化、国際化などの比較研究を行っている。氏は、日本の消費形態は世界に先駆けているため、日本社会をよく理解すれば、ブルガリアを含む国際社会のこれからの見通しを把握することができると見る。また、社会と経済の大きな変動下における知識人の倫理観と道徳的責任の重要性を強調する。

京都大学研究員Emilia Chalandon氏の報告は、日本の「わび」「さび」という美意識の流行が欧米の政治・経済・文化の発展と密接な関係を持ち、欧米から逆輸入された経緯があることを指摘し、「日本的」と思いがちなものは、実は「国際的」であり、「日本研究」には国際的視野がなければならないことを示唆する。さらに、釜山外国語大学校の朴正一氏の報告は、16世紀の日本の茶道における韓国陶磁の役割の大きさを指摘し、日本茶道の持つ「国際性」を示してくれる。

第2部「海外の大学における日本研究」は、海外の大学における日本研究の歴史と現在を教えてくれる貴重な情報である。スウェーデン、リトアニア、アイルランド、ブルガリア、オーストラリア、ラテンアメリカの諸大学において、日本語・日本文化の教育と日本研究とは助け合うものである。

ヨーテボリ大学のトゥンマン武井典子氏は、スウェーデンの大学の日本語教育と日本研究の現状を紹介し、近年、学生の日本語能力の向上は顕著であるが、予算編成上、研究テーマの選択が助成金取得の可能性を左右するため、文学研究のテーマでは資金獲得が非常に困難になっている点に触れている。これは言うまでもなく、「人文科学」の一分野である日本文学研究の存在意義が疑問視されているということである。高馬京子氏もまた、リトアニアの日本研究の歴史と現状と成果物を詳しく紹介した上で、「日本研究」が「アジア学」の一部として扱われている現在、学際性と国際性を利用しながら、「日本研究」の必要性を以前にもまして主張していく必要があることを教えてくれる。一方、アイルランドでは、予算困難のため、日本語・日本文化教育の規模が大幅に縮小され、日本研究も脅かされていることを、O'Malley 諸氏の報告から読むことができる。

ソフィア大学の Gergana Petkova 氏は、ブルガリアでは日本語・日本文化の教育が盛んで、日本研究の刊行物（書籍、学術誌論文、新聞雑誌記事等）が多数出版されているため、ブルガリア人は日本に特別な親近感を持ち、日本大衆文化に対する関心度が極めて高いことを紹介する。氏は、日本文化の伝達に大きな役割を果たしたソフィア大学の日本語教育と日本研究の現状、学生の学習動機、進路について具体的に教えてくれる。学生の3分の1が卒業時に日本語能力試験1級に合格し、残りが2級に合格している、という日本語学習熱の高さには目を見張ってしまう。ソフィア大学では、日本語は必ず、日本の文学・歴史・文化・経済などの知識と共に習得するよう教育を行っているという。

オーストラリア・アデレード大学の米山尚子氏の報告では、当大学の日本語教育と日本研究の現状、「地域研究をしながら言語も学ぶ」という教育方針、日本の大学との交流、豪州の日本研究に寄与した状況が詳しく紹介されている。また、日本研究と中国研究は相互作用の関係にあり、日本研究者たちは、日本を通して世界を見るという明確な目的意識を持っている点にも触れる。

メキシコ大学アジア・アフリカ研究センターの Amaury Rodriguez 氏は、スペイン語圏における日本研究にリーダーシップを発揮しているメキシコ大学の教育、研究、図書館の状況を紹介している。スペイン語圏で日本研究を発展させていくには、スペイン語で刊行した日本研究の成果物を英語や日本語に翻訳していかなければならない、とも指摘する。

第 3 部「私の日本研究」には、日本研究に人生を捧げた 5 名の研究者に寄稿していただいている。チェコ出身の Anthony Liman 氏はカナダ・トロント大学の名誉教授であり、私がトロント大学に留学した 1990 年から 2 年半、私を指導してくださった方である。ある日、私が借用していた研究室の引き出しの中に、氏がノーベル文学賞審査委員会に宛てて井伏鱒二を推薦した文書を見つけて驚いた。ノーベル文学賞は自ずとやってくるものではなく、海外の文学研究者が力を合わせて推薦してようやく獲得できるものだと、その時初めてわかった。Liman 氏がある日、新宿の居酒屋で井伏鱒二と酒を飲んでいると、ある編集者が井伏の文学を外人が理解できるのかと聞いてきて、井伏は「この人は外人ではなく、昔の日本人だ」と答えたそうである。今回の報告にもあるこのエピソードは、氏がなぜ日本文学に魅力を感じたのか、その研究がどれほど日本の人々に助けられたのかを教えてくれる。さらに、日文研の先達である梅原猛、中西進、山折哲雄、芳賀徹、河合隼雄諸氏についての思い出も綴られている。氏は 12 年をかけて『万葉集』のチェコ語訳を完成して、2008 年に刊行している。

復旦大学の趙建民氏は、上海事変（1937 年）が起こった直後に誕生した方である。それが因縁となり、日本の歴史と日中関係史の研究に駆り立てられたという。氏の文章を通して、社会主義国設立後の中国は、政治的要因によって、日本に関する学術的研究が極めて困難だったことがわかる。文化大革命の終息後、氏は日本と中国の頻繁な学術交流によって幅広く研究を行い、数多くの論考を上梓したことを振り返っている。

カナダ・マギル大学の Yuzo Ota（太田雄三）氏は、日本の思想文化史、対外交流史の研究に貢献してきた研究者である。掲載稿は、McGill で 38 年の勤務を終えた際に行った「退官記念講演」録である。氏の多くの著書のうち英語で書かれたものは 2 冊で、1 冊はバジル・チェンバレン、もう 1 冊は神谷美恵子に関する評伝である。チェンバレンを取り上げたのは、その思想と経験に共鳴

を覚えたからだという。すなわち、各国文化の特殊性よりも普遍性を求めるということであった。この講演に見られるのは、日本の特殊性を主張せず、文化の普遍性に信頼を置こうとする Ota 氏の信念である。

杭州師範大学の楊際開氏は、中国と日本の関係において革命家たち（章太炎、宋恕、梁啓超、譚嗣同、魏源、吉田松陰など）の果たした役割に注目し、独自の視点を紹介してくれる。氏の文章に、中国と日本の近代史上における思想家たちの相互影響を見ることができ、30 年来、常に日本との比較によって中国研究を行ってきた足跡がわかる。氏は、日文研のこれから果たすべき役割にも言及する。

イタリアのカ・フォスカリ大学の Luciana Galliano 氏は、日本現代音楽の研究者であり、1960 年代が日本だけではなく、欧米においても現代音楽の最も豊饒な時代ではなかったかと指摘する。人間の情緒を最大限に表現できる言語ともいえる音楽を研究すれば、各民族の特色をより的確に把握できるという考えの下、音楽によるコミュニケーションの有効性を体験し続けていることを報告する。

最後に、日文研で 6 年間にわたり海外研究交流プロジェクト員として勤務した、琴浦香代子氏の感想文を掲載する。氏は外国人研究者の受け入れ、シンポジウムの開催と学術交流に携わった経験が豊富であり、日文研がいかによりよく海外の日本研究に協力することができるかについての意見を吐露してくれる。傾聴すべき点が多くある。氏はまた、本号の原稿募集にも尽力された。

海外の日本研究者は、日本内外の資料と研究成果を利用しつつ、独自な立場と視点によって、日本文化の性質を問い続けている。また、日本国内の人文科学の発展があったからこそ、海外の日本研究も大きく発展できた、という例は数多い。「日本研究」という学問がなければ、どれだけ多くの歴史的、社会的、文化的現象が不問に付されたかを、本号それぞれの論考によって知ることができるだろう。

「日本研究」が必然的に持つ国際性、学際性、比較性は、人文科学研究がこれから目指すべき方向性ではないかと思う。また、人文科学の研究成果が国際社会の相互理解に大きく貢献できることは、今後ますます明瞭になっていくだろう。